

郷土の若手落語家、 「応援して」

落語家、落語芸術協会理事

柳亭楽輔さん

Rakusuke Ryutei



経歴

本名笹本邦雄。静岡市葵区生まれ。静岡市立高校卒業。舞台芸術学院を中退し、1972年、4代目柳亭痴楽に入門、楽輔で前座。73年に痴楽が病に倒れ他界するまでの約20年間を弟子として介護。その傍ら三笑亭夢楽の預かり弟子となり修業を積み、76年、二つ目昇進、87年、真打ちに昇進。63歳。

現在、公益財団法人落語芸術協会理事。弟子に3代目柳亭小痴楽、柳亭明楽ら。出囃子は「砧」。多数のテレビ、映画に出演、日本テレビ「ルックルックこんにちは」のリポーターを17年間務めた。女優の笹本れいかは長女。

静岡市にゆかりがあり、東京を拠点に内外で活躍する皆様に、東京から見た静岡市の良さと可能性、まちづくりの方向について、ご提案いただきます。

静岡弁で苦勞

中学生のときに、ラジオから流れてくる落語を耳にして「これは究極の笑いだ」と瞬間的に思ったという。「人情もあればちよつとしたドタバタもある。笑いの全てが入っている。これを一人で演じる素晴らしさ、魅力に惹かれました」。

小さい頃からお笑いが大好きだった。ひよつとこ踊りをしたり、「とにかく人を笑わせてその場の空気を楽しませるのが好

きでしたね」。高校に入ると自ら落語研究会を立ち上げ、文化祭で披露した。家庭の事情で大学進学は断念したが、縁あって4代目柳亭痴楽に弟子入り、1987年に真打ちに昇進した。

上下関係やしきたりに厳しい落語界。下積み時代は苦勞の連続だったようだが、思わぬ所で難儀したのが静岡弁。「自分を含め静岡の人の多くは標準語だと思っ

何度も注意されました」。

「落語というのは、その落語を通して自分を出すもの。それぞれの味や個性がなくしてはならない」が持論。落語人気を反映して落語家を目指す若者は多いが、「若いのに妙に年寄りじみた話し方をしたり、うまい人の真似をしてうまがっちゃ駄目なんです」とクギを刺す。

「福祉寄席」、活用を

郷里静岡に対し、あえて辛口の批評を求めると「誇れることは山ほどありますが、意外に地元出身者がかわいがらないように見受けられます」。大相撲の地方巡業では、たいいてい郷土出身の力士には大声援が飛び、盛り上がる。「それが静岡では、あまりないですね」と寂しがる。

「噺家でも東京で売れなくても、郷里でラジオ番組を持っていたりします。売れてから使うのではなく、売れる前に応援していただけたら嬉しいですね。特に若手落語家を地元で応援してかわいがってほしいですね」。

笑いは認知症予防や健康にもよいとされ、関連を調べる研究も盛んになっている。時間があれば老人福祉施設の慰問や「学校寄席」に出向く楽輔さん。「市の福祉担当の方などが音頭をとってくだされば若手（の落語家）も喜んでつかいがいますよ。落語の面白さ、素晴らしさをぜひみなさんに聴いてほしいですね」。

（文：長田義明、写真：柳亭楽輔さん提供）